

成人向け

俺の彼女がサークルのイケメン先輩に寝取られる
なんて事あるわけがない

ねとらる！

ここは都会の有名な大学



俺はたける。
猛勉強の末、この大学に入ることができた。
四月からは一人暮らしだ。
本当に受かるなんて、夢のようだった。
やればできるもんだなっと思う。
なぜ、必死に勉強してこの大学に
入ろうと思ったかという……



「あつ、
たける君」



「さとみ、もう来てたんだ」

彼女は幼馴染で、高校から付き合い始めたのだけれど、俺より成績がよくて、志望校に格段の差があった。別々のキャンパスライフはいやだったので、必死に勉強してなんとか一緒にこの大学にこれたのだ。

本当はこんなちやらいテニスサークルにも入りたくはなかったけど、彼女が入るっていうから……



「もう慣れた？」



「はい」

あいつはサークルの先輩で、新入生の女の子は皆かっこいいと言っている。
あんな顔だけのやつどこがいいんだか。
さとみも話しかけられてうれしそうにしやがって、くそつ。

新歓コンパ

今日は旅館を借り切って泊まりで新入生歓迎コンパが行われた。



「さとみ、一緒に飲もうよ」



「新歓なんだし
もっというんな人と
触れ合ったほうがいいよ」

そういって彼女は行ってしまった。



「さあ、どうぞ」



「ありがとうございます」

またあの先輩がさとみに話しかけてる。



「あ、あらつめ……」

「ほら飲んでるか？」



「は、はあ」

他の先輩につかまってしまって
飲まされてしまう。

そのうち酔いつぶれて寝てしまった。



「気付いたら寝てたよ」



「私も割と早く寝ちゃった」

さとみに何もなさそうであった。

ストーキング

ある日



「あれは」



さとみと先輩が二人で歩いてる。
いったい何をしてるんだ……

どうにも気になるのでつけてみる」と思った。

二人を追って部室などが入ってる建物にきた。



(どこに行く気だ)



二人は印刷室に入っていった。



(ぎゅぎゅぎゅ……)

印刷室は内鍵がかかるので、
連れ込み部屋として使われているらしい
という話を聞いたことがある。

どうすることも出来ず、
扉の前でうろろうろしてたら、
通りすぎる人たちに変な目で見られた……

しかたないので、少し離れた柱の影に隠れて
出てくるのを待つことにした。

一時間ほどして、二人が出てきた。



「また、たのむよ」

「はい、私でよければ」



「じゃあ俺、他にも用事あるからこれで」



先輩は一人行ってしまった。

俺は一人になったさとみに話しかける。



「つけてたの」



「いや、さっき見かけたから」



「な、何でニニニ」



「さとみ、
な、なにしてたの」



「なについて、先輩がパンフ印刷するの手伝ってただけよ。
それがいけないことなの？
私は何かするたびにあなたの許可を取らなければいけないの？
こそこそ私のこと監視して気持ち悪い。
あと、呼び捨てにしないで、私はちゃんと君付けで
読んでるでしょ、
私はあなたのものじゃないのよ、付き合ってるからといって
勘違いしないで」

さとみは怒って行ってしまい、
僕は一人取り残された。

しばらく口もきいてくれなかった。

ファーストキス



「あ、たける君」



「さとみちゃん、もつよ」

さとみちゃんが一人買い物袋をもって、歩いている。



(あれは)

サークルによつたけど、さとみちゃんがいなかったので一人で帰宅。

荷物を運んであげる。



(食材みただけけど、結構量がある。)



「や、やすかったから
まとめてかったの」

しっかりしてるな。



彼女のマンションのすぐそばまで来た。
まだ、部屋に入れてもらったことはない。

「JJJでいいから」



「あ、あの部屋に……」

勇気を出して言おうとしたとき……





「あ、ありがとう」

そう言って彼女は行ってしまった。



(やった
ファーストキスだ)

彼女の柔らかい唇の感触を僕は
しばらくの間、忘れることができなかった。

合宿

夏休み

サークルで合宿に来た。



「暑いな」

一応テニスコートもあって、
昼間はそれなりに練習したりもする。

夜

「あの映画めっちゃおもしろいから」



「まじで」

最初はチャラくていやだったが、
気がつけば何人かと仲良くなっていた。

いろんな人と交流してみるもんだな、
さとみちゃんの行ってたとおりだ。

「んっ」



「どうした」

「うめき声みたいなの聞こえない」

耳を澄ますがなにも聞こえない。



「何も聞こえないじゃん」

「びびらせんなよ」

「あれ、おかしいな」

「それよりウノやろうぜ」

「こうして夜更けまでみんなで遊んだ。」

合宿打ち上げ

合宿最終日打ち上げ



「いっしょに飲も」



「うん」

珍しくさとみちゃんが誘ってきた。



「……」

さとみちゃんはすごいピッチでお酒を飲んでる。



「だ、大丈夫？」

どうしたんだろう……

さとみちゃんが酔っ払ってもたれかかってくる。

酔っ払っちゃったみたい

俺はさとみちゃんを休ませるために、
適当な部屋に彼女を連れ出す。





「ねえ、回でしてあげようか」



「えっ」

さとみちゃん何を言ってるんだ……

さとみちゃんはズボンのチャックをおろすと俺の局部を露出させくわえる。

なっ……
なんで

ちゅぷっ

ちゅぷっ

ちゅぷっ

さ、さとみちゃんが僕のをくわえている。
ど、どうして急に……

さどみちゃんは激しく口をピストンさせる。

ちゃぷっ

ちゃぷっ

んじっ

すっ、舌が絡みついてくる

で、出るー！

ぞんぷん。ちゃぷん。ちゃぷん。

僕は我慢できずに、さどみちゃんの口の中に出す。

さとみちゃんは僕の精液をティッシュに吐き出す。



「うん」



「気持ちよかった？」



「うん」

さとみちゃんは満足そうだった。

初めての.....

彼女と一緒に帰宅中。



「家、来る？」



「え、ささ」

ついに彼女の部屋にお呼ばれした

彼女の部屋に初めてはいる。



(なんか緊張する)

しばらく雑談してたら……



「どうしてあげようか」

どうしようか。

さとみちゃんは風呂場に僕を連れて行き服を脱がせると、
マットに寝かせる。
「このマットって……」

ねえ、気持ちいい？

う、うん

彼女の裸を見るのも初めてなら触れるのも初めてだった。
さらに、最初からこんな……

パロッ

パロッ

ぬちゃっ

ぬちゃっ



たける君に喜んでもらおうと思つて
一生懸命考えたの

こやしをなこよ

いぢ?

ちよみちちん、ぶいんじよ...

ぴゅっ

ぴゅっ

ぬちゅっ

げんじゅっ

俺はもう射精寸前だった。

すぐに、だしちゃだめだよ、
我慢してね

う、うん



つけてあげるね

そういつてさよとみちゃんはコンドームをどーからか
取り出すと僕につけてくれた。

な、なんでコンドームなんかもっているんだらう……
ていうかコンドーム付けるって……



さとみちゃんが僕に馬乗りになる。

ああっ

んんっ

さとみちゃんの中に入ってる。

ズ
ブ
ブッ

さとみちゃんが僕の上で腰を振る。

ねえ、気持ちいい？

ばん

ばん

イふっ

ばん

イふっ

うん

本当？

本当だよ



さとみちゃんの動きが激しさを増す。

さとみちゃん、はじめてじゃないのかな……

ねえ、たける君も腰動かして

気持ちいい？

う、うん私も気持ちいいよ

ぱん

ぱん

ずん

ずん

ぱん

ずん

ぼくはさとみちゃんに言われるがままに動く。

だ、だめだ

我慢できずに射精してしまっ。

ドブ・ブツ

もうでちやったの？

う、うん

ううん、いいの

卒業

卒業シーズン

追い出しコンパが行われる。



さとみちゃんは先輩と話してる。



まあ、先輩はもう卒業で
最後だし……

気付いたらふたりの姿が見えなくなっていた。



「あれ、ど「い」」

「おいたける、「うち「いよ」

僕は他の先輩に捕まり、
しこたま飲まされた。

一時間ほどしてからさとみちゃんが「うちに来た。」



「せ、先輩は？」



「別に何も……
もじがして、焼いてる？」



「そ、そんなわけ」

大丈夫、僕はさとみちゃんを信頼してるから。

俺はさとみちゃんに空いてる部屋へとつれられていった。



「あつちで休みましょう」




「うん、けっこう飲んだから」



「ずい酔ってるみたい」

それから……



しばらくして、さとみが妊娠が発覚した。

あまり覚えていないけど、どうも酔っ払って避妊せずにしてしまったらしい。

俺は自分の浅はかな行動をさとみに謝罪した。

さとみはその子を生むといった。

僕は大学をやめ働き始めた。

僕は幸せだ。